

△対談▽

聖徳太子と日本仏教

三経義疏の真偽論

梅原 私から話を始めさせていただきます。

実は、私は六年ほど前から聖徳太子の本を書いているわけです。十数年前に私は「隠された十字架」という本を書き法隆寺怨霊説というものをとなえたのですが、その説が一部の聖徳太子信者にとって、ある種の不快な感じを与えたんじゃないかと思うんです。太子を怨霊だとするのはけしからんというわけです。しかし実はあの本は、聖徳太子はどういう人であるか書いてございません。

中 村 元
梅 原 猛

聖徳太子が死後百年後どのように祭られたかを書いたのでございます。ああいう本を書いた以上は、次には聖徳太子がどういう人であるかということ明らかにしなければならぬという責務感が私の心の中にありまして、六年ほど前から聖徳太子のことを書き始めて、それを大体系き上げたのでございます。

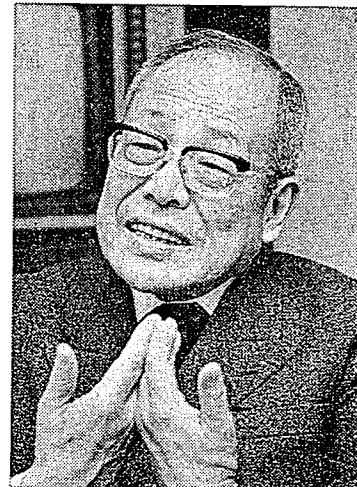
それで、太子を年代的に順次論じてきたわけですが、聖徳太子の晩年になりますと、例の三経義疏という問題が出てきまして、その三経義疏が太子の書いたものかどうかというのは大変むづかしい問題だと思うんです。私



梅原 猛（うめはら たけし）氏
大正14年生れ、京都大学哲学科卒業
現在、京都市立芸術大学学長。

こともありますし、義疏の和訳なんか仲間と一緒に試みたこともございます。三経義疏が太子の真作かどうかということが今問題になっていますね。あれについて、私の立場はこうなんです。あの問題をみますと、太子の真作じゃないということを言おうとする人は、どうも政治的な意図があると思うんですね。つまり、今まで余り太子を上へ奉ることが多かったから、引きずりおろそうと思って、太子の真作じゃないという。今度、それに対して、太子の真作だということを強く言う人は、それによって、ある種の通念を権威づけようと思っていると思うんですね。けれど、私は歴史家の立場じゃなくて、思

そういう立場から見ますと、日本人の大部分の人が太子の真作だと思っていたというその事実は、歴史的事実として重要であると思います。それは書物の内容がいいか悪いかということは離れて、思想的事実として、これは重要なことだと思います。それが日本人の物の考え方をなどを解明するための一つの手がかりになると思います。それから、今度その中に書かれていることが果たして価値があるかどうかということですが、私は精細な研究



中村 元（なかむら はじめ）氏
大正元年生れ、東京大学印度哲学梵文学科卒業、現在、東方学院院长、
東京大学名誉教授。

は正直に申しまして、聖徳太子についての本を書くまでは懐疑的だったんですけれども、今度三経義疏を読んではみまして、太子の書いたという可能性が大変高いんじゃないかと思うようになりましたけれども、先生、いかがでございますでしょうか。

中村 最初から問題をぶつけていただきました。怨霊説ですね。これは、私は勉強していませんから何とも申し上げられませんが、外国でも、スリランカでは、やはり王室の内部で争いがあった、王子が殺されたという場合に、その怨霊をなだめるためにお寺を建てたということはあるんです。ですから、怨霊云々ということとは

日本で重要な問題ですけれども、同時に、汎人類的な問題だと思ふのです。それで、将来はそういう考え方が外国にあるのを、それと比べてみたら、日本人の怨霊の觀念がもつとはつきり出てくると思います。

・神道学の方でも怨霊説を最近唱えられた方がございますね。名前は言わないでおきましょう。これは西田長男さんのお弟子さんでして、非常に広い視野からリベラルな立場で神道思想を研究しておられる方です。その方の学的業績は私はまだよく知りませんが、わたくしは、西田さんの業績は幾らか検討し、話したことがあります。それを受けて、そういう学者が靖国神社問題について、怨霊をなだめるためということを言われたというのは無視できないと思うのです。今政治的な理由のゆえに、その学者は、こういうふうにはいはいかんとか、地位も大分危うくなっているとか聞きますけれども、しかし、純学問の立場から公平な気持ちでこの問題は検討すべきじゃないかと私は思っています。それだけのことしか申し上げられません。

それから、太子の思想、私は本当に素人ながら論じた

歴史研究者の立場で申しますと、書物の中に書いてあることは、だれが言ったかということとは、それほど問題にしないでいいと思うんです。そこに書いてあることがいいことかどうか。真実を語っているかどうか。その方が問題だと思うのです。無論、歴史家にとっては、これを本当にAならAという人が書いたかどうか、これは大問題だと思うんです。そういう研究を決して無視することとはできないと思います。しかし、思想というものは個人を離れていてもひとり歩きするものなのです。例えば古代の思想が現代にだって影響を及ぼすことはあり得るわけです。

をしておりますから、ちょっと申し上げることはできませんけれども、非常に簡にして要を得て、ポイントを突いていると思うのですね。

梅原 そのとおりですね。

中村 シナの書物は、それは元のお手本もあったかもしれないませんが、最近見つかったテキストなんかの類似が言われていますけれどもね。やたらに学殖を誇って、一つの漢字について、こういう意味もあり、ああいう意味もありとただ並べ立てて、じゃ、結局、その要点は何だということを言っていないんですね。それは、このごろの日本の学者のやり方もちよつとそれに似ていると思うのですけれども、太子は、わからないことは凡愚の及びがたいところだと言って、要点だけはぱつと出しているんですね。このいき方というのは大したものだと思いますね。だから、真作かどうかは、私にはどうとも言えませんけれども、太子の論議の仕方というのは大したもの、今の我々でも大いに学ぶべきものがあるのではないかと私は思っております。その意味で、三経義疏は今の日本人が取り上げる意義は十分あるものと考えて

おりますが、どんなものでございましょうかね。

梅原 おっしゃる通りに、政治的な立場で議論され過ぎたと私も思いますね。戦後は津田史学の影響が強いのですが、これが太子否定の一番の激しい議論で、三経義疏どころか、十七条憲法まで否定されてしまったんですね。

中村 そのようですね。

梅原 津田さんの立場は啓蒙主義の立場でして、ヨーロッパでも十九世紀にはそういう啓蒙主義的歴史研究が非常にはやりまして、先生のご専門の仏教学でも、そういう立場から、いろいろ思いきった議論が出た。釈迦の存在を否定するとか、キリスト教でもそうなんでしょう。イエスの存在まで否定している。

中村 そうなんです。ブッダの存在を否定した人までいました。スナールという、フランスの一流の学者ですね。ブッダの存在を否定しまして、あれは天文神話だなんて言うんです。それと同じですね。

梅原 そういう史学の日本における一つのあらわれが津田史学だったと思いますけれども、大正デモクラシー

の思想的風潮の中でああいうのが出てきてまして、どうし

ても偉い人間というものはあり得ないんだと。日本書紀やその他で語られ、そして後にいろいろ潤色された偉大な太子という、つまり政治家としても超一級で、学者としても第一級だ、そんな人間というのはあり得ないんだ。そういう偉人否定の気持が大正デモクラシー史学の中にあったような気がしますね。そういうものを否定していった。三経義疏から十七条憲法にまで懷疑が及んだのです。その津田史学が戦後、戦後の歴史家に継がれてまして……。

中村 継がれましたね。

梅原 それで、古事記、日本書紀の神話なんかも疑われて、それと同時に、太子の実績に対して否定的な見解がどうも支配的だったような気がしますね。それで、私どももどこかでその影響を受けてまして、実は太子についての日本書紀の記事に対しても、十年前は大分否定的だったですね。「隠された十字架」のころは相当否定的だったですからね。今度、もう一度ずうっと太子の実績を検討し直すと、日本書紀の記事は、生まれたときにイエ

ス・キリストみたいな形なんです……。

中村 そうですね。そこから始まったんですから。

梅原 死ぬときだけお釈迦さんみたいな死に方をして、そういう多少の潤色はありますけれども、大体重立った実績は、そのまま太子の実績と認められるのではないかと認めた方が歴史を全体として説明するのにいいのではないかと今思っているんです。三経義疏につきまして、花山信勝さんは、大変おもしろい説をのべていられる。特に三経義疏は、太子自筆の文と称せられる。それが残っている。法華経義疏には非常に誤字が多いわけですね。仏教の小乗というのを少乗、すなわち少ない乗と書いてありますね。それから舍利弗でも舍利仏と書いてある。誤字が多いし、そして経典の根本解釈にちよつと問題点があります。にもかかわらず、実に教義を簡明に要約して、しかも、私はこう思うということを実にはつきりと言われているでしょう。

中村 必ず言われるんです。自分の考えをね。

梅原 そして、使っている註釈書は非常に少ないですね。

中村 そうだろうと思いますね。

梅原 だから、例の藤枝晃さんが敦煌本の中に、勝鬘經義疏と似ているという本を見出して、だから三經義疏は聖徳太子が書いたものじゃないという議論を提出されましたけれども、私は、勝鬘經義疏を敦煌本と比べてみましたが、しかし、それは確かにあれを踏んでいます、必ずしも内容は一致しない、敦煌本にない思想が義疏にある。だが、勝鬘經義疏は敦煌本を底本としている。維摩經義疏には僧肇の本ですね。それから法華經義疏には法雲ですね。

中村 光宅寺法雲です。

梅原 そうですね。それを参照していますけれど参考書は少ない。少ない参考書で經典を非常によく理解して、向こうの誤ではこうであるがおれはこう思うという、日本の学者に珍しいですね。

中村 そうですね。日本の学者にしては珍しいですね。

梅原 大変、珍しいんですよ。

中村 全く今の学者でも珍しいですよ。

梅原 だから、私はそこから見て、著者は太子じゃない

いかという、花山信勝先生の説は正しいと僕は思いますけれども……。

中村 私も何かそんな気がするんです。

聖徳太子解釈の独自性

梅原 先生は、その三經典の中でどれが一番好きですか。お好きと言っては、どうも……。

中村 特に三つのうちのどれということば申し上げにくうございますけれども、痛切に響くような言葉がございましょう。あるいは、原典に対して批判的な言葉が述べられていますね。

梅原 日本の思想史の中では、ちょっと異例なことじゃないでしょうかね。

中村 日本思想史の中で異例ですね。あれだけ原典に対して反抗した解釈を述べている。殊に一つの例を申し上げますと、「山林に住む小乗の学者に近づくなかれ」云々という言葉が法華經にあるというのですね。もとは「人々に近づくなで山林に住め」という文句なんですよ。それに対して聖徳太子の解釈は「山林に住むような小乗

の学者に近づくなかれ、そんなことをしていたら、人々

を救うよすががなくなるから」と、そういう言葉なんです。漢文というのはどうにでも読めますからね。返り点のつけ方で変わるのです。それは原典から見ますと、どうしたって山林に住む方を勧めていると思います。ところが、聖徳太子の解釈は違って、「山林になずんではいかん。人々のために教化の活動をせよ」という意味にとっておりますね。これなんか全く独特でして、私の知っている限りでは、アジア大陸でこういう解釈をした人はいないですよ。

梅原 そうですか。

中村 そこに日本仏教の一つの方向づけが見られるような気がするんです。その後も、日本の仏教というのは、世俗の生活から離れないで進んでおります。それは、山林にこもるような行者さんもありましたけれども、全体のコンテキストは、世俗の生活と緊密に結びつくという方向をとっていたのです。たまたまそこに色合いをそえるために、山林に住んでいた人がぱっと輝いて光を当てられている。全体のコンテキストはそうだと思うんです。

梅原 そうですね。

中村 そうしますと、日本の仏教というものは、聖徳太子のときからそういう考え方を受けているということば言えますし、さらに明治以後の近代化の問題に結びつくと思うのです。ヨーロッパ以外の国々では、宗教が近代化を妨げたという問題があるわけですね。ところが、日本にはそれがなかったわけです。というのは、世俗の生活の中に仏教を実現するという考え方が、聖徳太子から始まって、その後途切れ途切れにずうっと出ております。だから、近代化をむしろ基礎づける方向に進んだと思うのです。今、日本人はよく働くということを言う。これが同時に産業を盛んにならしめた原動力になっているわけですから、働くことの中に宗教的意義を認めていると思うのです。

ただ、金のために働くんじゃないのです。つまり、西洋的な考え方というものは一概に言えませんが、自分分は金もうけのために働く。そして、収入を得たら、そこでレジャーをエンジョイする。この二つを分けているわけなんです。ところが、日本人の場合は、その両

方を渾然と一体化しているんですね。働くことの中にレジャーの喜びがあると同時に、レジャーも働くことと必ずしも分かれていない。だから、渾然としている。これが日本の近代化を大いに助けているんじゃないでしょうか。

梅原 そうですね。山林も世俗の中に組み込まれるんですね。

中村 山林が世俗の中に組み込まれているんですね。

梅原 だから、聖なるものが山林にあるとすれば、聖なるものは、必ず俗なるものを浄化する役目をもつ聖なるものですね。

中村 そうなんですね。それは聖とか俗とかというのは、ヨーロッパの宗教学の仮に設けたカテゴリーですね。けれども、日本人の場合には、それが相即しているわけです。古くさかのぼりますと、大乗仏教の、殊にナーガールジュナのあたりまでいきます。輪廻と涅槃と異ならず、仏様はどこにましますか、この輪廻の移りかわる世界の中にまします。そういう考え方は、日本でも道元なんか強調しておりますね。ですから、それを受けているわけですが、一層現実的に展開したのは聖徳太子じゃないでしょうか。

いでしょか。

私は非常に特殊なことを申し上げますけれども、羅什の翻訳を検討したことがあるんですよ。例えば維摩経なんかを。そうすると、原文に比べまして、現実性、世俗性を強調している。そういう訳になっているんですね。

つまり、チベット訳とか、あるいはほかの訳と比べてみましても、そう言えるのです。維摩経の原本で残っている部分は少ないんです。断片が十幾つかございますけれども、その訳にも見られますし、チベット訳なんかと対照してみるとよくわかるんです。鳩摩羅什の訳というのは、現実性を強調しているわけです。だから、それが今度はシナ仏教を基礎づけている。さらに、日本へきて、聖徳太子によって一層現実性を持って展開したということになるんじゃないかと、ひそかに考えております。

梅原 勝鬘経義疏を読みまして、本当に久しぶりに私は感動を覚えましたね。太子の肉声を聞くようなものを感じましたね。先生の翻訳を参考にしながら読んだのでございますけれども、勝鬘経というのは、なぜ太子が勝鬘経を説いたかという、私どもが昔から聞いていたの

は、推古天皇が女帝だから、勝鬘夫人が語って、釈迦がそれを認めたという経典を、女帝のサービスのために書いたんだと、よくそういうことを言うんですね。

中村 よく学者はそういうことを言いますね。

梅原 そういうことがあるかも知れないけれど、聖徳太子の解釈だと、一乗仏教というものが説かれているのは、法華経と勝鬘経だけだということですね。これは、先生、そういう解釈はどこか中国にあるのかどうか……。

中村 私はよく存じませんが……。けれども、太子が三経を選ばれたということは大きな意味があるのです。とにかく大蔵経には一万余巻があるわけでございます。よう。無数に経典がある中から、特にあの三つを選ばれたということ、何か意義がある——無論こういう議論があるんです。その三つの経典は、既に隋の時代までに読まれていて、太子はそれを受けたにすぎない、そういう解釈もあるのです。しかし、隋の時代までに読まれた経典はまだ他にたくさんあるのです。その中からわざわざなぜ三つを選んだかということ、これはやっぱり一つの太子の立場だと思うのです。それで、維摩経の立場と

いうのは、申し上げるまでもなく世俗仏教ですね。だから、出家仏教に対する反抗ですよ。出家するのに必ずしも剃髪し、衣をまとう必要はない。清浄な心を起こしたところが道場である。それが出家であるという教えがございますね。それで、出家している修行者たちの方がかつてこたわりがあつて、悟りを得ていないという教えが繰り返しございました。そこに一つのポイントがあるわけです。

それから、勝鬘経は、中に説かれていることは非常に哲学的で難しいですけども、その立場というものは、二つの点で伝統に対する反逆だと思うのです。一つは、在家の人が教えを説いたわけです。今までは……。

梅原 釈迦ですね。

中村 出家者がこれを説くわけです。もう一つ女人が説くということです。これがインドではなかったですね。古い時代にあったウパニシャッドなんかを見ますと、婦人の哲学者が男子と堂々とやり合っている。それから、詩人などは婦人が非常に多いんです。けれども、仏教の教えを説くのは、まず出家者の男性で

したね。ところが、在家で、しかも、女人である人が教えを説いている。お釈迦さんがそれをそうだ、そうだと行って認められるという立場だったのです。これは二重の意味で革命的なことなのです。それをわざわざ聖徳太子を経て解釈されて、そこにまた自分の独特の表現がありますね。仏子勝鬘とか何とか。そこで、新たな展開を示しているというのは大したことだと思いますね。

梅原 当時、中国の仏教界は、南北朝から隋へということで、南朝の仏教は涅槃經中心の仏教でした。

中村 そうでした。涅槃經が非常に……。

梅原 それで、勝鬘經というのは、普通涅槃經の中属していると思われるんですね。

中村 似たような思想ですからね。

梅原 ところが、太子の解釈は、勝鬘經というのは、法華經と並んで一乗經典だと。それで、彼は、もう一大乗という言葉をつくっていますね。

中村 そうです。

梅原 そういう勝鬘經は法華經と同じく一乗思想を説いたんだという解釈ですね。今の勝鬘經義疏の前半は、

日本思想における一乗思想の意味

梅原 それで、その一乗思想というのは、基本的に差別を説かない、平等を説くわけでしょう。大乘仏教の中でも小乗と対立する大乘の立場では差別が生ずる。一乗はこういう差別のない、すべての人間は平等であり、すべて成仏出来るという立場にたつ。これは日本の思想的伝統に非常にぴったりです。伝統的にそういう思想が日本にはあったと思います。それでその平等思想は日本では人間の平等どころか動物まで平等だという思想に変わったと思うんですよ。これは、私はもう革命的なことだと思いますね。

中村 本当に革命的なことだと思います。西洋思想においては、異端者と正統派を分けまして、異端に対する憎しみが極端なんです。ところが、日本人の間では憎む思想が少ないですね。みんな救われれば仏の子であると思うのが一乗思想ですね。そこに一乗思想が働いていると思うんです。それがまたいい面ばかりとは言えないかもしれませんが余り追及するということをやら

一乗思想について論ぜられている。

中村 そうですね。

梅原 この一乗思想というのは、日本の思想を考えるときに大変重要なことですね。

中村 そのころの日本思想にとって非常に大事ですね。

梅原 一乗仏教は最澄から始まるというがそうではない。太子から始まっているんですね。つまり、法華經中心の日本仏教の性格をつくったのは太子だということになる。一乗仏教の先駆者が聖徳太子であり、聖徳太子がいなかったら、最澄はいなかったんじゃないか。

中村 そうでしょうね。

梅原 最澄がいなかったら日蓮はいない、日蓮がいなかったら創価学会もないことになるんで……。

中村 日本仏教の大部分の宗派が比叡山から出ているのです。比叡山は法華經中心ですから、そうすると、勝鬘經を取り上げたのは聖徳太子だと思います。だから、勝鬘經というのは、従前はつけ足りのお経みたくに見られたんです。ところが、そこに深い意味があるということとを指摘されたのは、やっぱり聖徳太子ですね。

ないわけです。けれども、とにかくすべての人を包容するという気持ちで日本人の間に非常に顕著なんです。それを哲学的に基礎づけたのが一乗思想じゃないですかね。

梅原 そうだと思います。だから、日本の聖徳太子の仏教は、大乘仏教であって、そういうことも大きいですがけれども、特に一乗仏教だということですね。これは、日本の思想的伝統に大変合った仏教だと思えますけれども、同時に、その後の日本仏教の性格をも決定してしまった。

中村 そうだろうと思いますね。

梅原 それと、例の法興寺すなわち飛鳥寺の大仏さんです。あれは推古十四年に作られています。既に法興寺ができていたんですね。それは蘇我氏の寺であった飛鳥寺をそのまま国家の寺として仏像だけ入れかえたんだと思います。最初に小さい本尊が入っていたんですよ。それを入れかえたから、入らなくて、堂を壊さずによく仏像を安置したというので、鞍作止利が褒められたんですよ。

そうすると、あの丈六の釈迦像というのは、一乗仏教の釈迦像で、本尊の入れ替えて今までの蘇我氏の仏教と

は違った仏教なんだということを、太子は、あの仏像で示そうとしたんじゃないかと私は思います。

中村 そうですね。一乗思想というのは、太子によってはっきり表明されたと言えましようね。

梅原 しかも、一大乗という言葉は、誰もいわなかったんじゃないでしょうか。

中村 大乘ということは言うんです。それから一乗も言うんですが、一大乗ということは、サンスクリットの原文には出てこないと思います。

梅原 中国にもないでしょうね。

中村 私は調べておりませんが、ないと思いますよ。やっぱり聖徳太子の発明じゃないですかね。

梅原 あれは法華經義疏になって初めて出てくるんですね。

中村 そうですかね。

梅原 勝鬘經義疏の段階にはまだ出てこないんですよ。法華經義疏になって出てくる考え方でして、だんだん一乗思想が展開していつて、とうとう一大乗という考え方になります。一大乗という言葉は、本当に日本思想を解

明するキーになるような言葉であると思います。

中村 そうですね。日本人というのは、大体昔から包容的でしょう。それは異民族との戦争なんかもあったと思いますがそれでも、とにかく全体を包容して、みんなばうざり殺しちゃうということをしなかったんですね。これは西洋の場合と大変違うわけです。西洋では、異民族とぶつかる、もう異民族は徹底的に消されちゃうわけです。例えばローマとカルタゴとがぶつかった場合もそうでしょう。全部もう奴隷にするか、殺すかした。それから、イギリスヘローマの軍が侵入したといったって、やっぱり同じことをやっていますね。ところが、日本人の場合には、内輪争いはあったでしょうけれども、何か最後には全体を包容するという傾向が、その後までずっと続いています。だから、日本では、支配者が徹底的に殲滅されるということがあったけれども、少ないと思います。

梅原 大変少ないですよ。親分だけやられて、あとはまた救っていくんですね。

中村 そうなんですよ。

すね。

梅原 だから、私は一大乗という言葉は、「和を以て貴し」という言葉と結局同じ意味ですね。

中村 同じことですね。

梅原 だから、憲法十七条を太子の作と認めたら、三經義疏も太子の作であることを認めなければならぬですね。

中村 そういうことになりますね。ただ、「和を以て貴しと為し」の方がわかりやすいんです。それから、一大乗というのは哲学的な表現ですね。それは表現された場所が違うからですが、この思想は非常に重要なもので、将来、地球上の社会がだんだんとグローバルになりますね。その場合には、「和を以て貴しと為し」という考え方が地球的規模で重んぜらねばならないと思いますね。

梅原 僕もそう思うんです。つまり、人間と人間とも和を以てということになります。

それから、人間と動物も和を以て交わる。動物も植物にも同じ仏性がある。しかもそこに本質的な差別がない

梅原 それは一大乗という思想とどこかで通じる思想ですね。

中村 それは無意識のうちに一大乗があるんです。武將の中にさえも働いていたということが言えるんじゃないですか。

梅原 だから、聖徳太子の憲法の中に、「和を以て貴しと為し」というのは、一大乗というのとは裏腹だと思いませんか。

中村 そうですね。裏腹ですね。本当におっしゃるとおりだと思います。日本の支配者の交代を見ても、前の時代の支配者が一応存在を認められています。例えば足利氏というのだって、足利さんの子孫というのはずうっと残っていました。それから織田の子孫もあり、徳川があつて……。徳川も徹底的に殲滅はしませんが、むしろ包容的でしたね。また、明治維新のときに薩長との対立があつたけれども、結局、最後は「和を以て貴し」で解決していますものね。勝海舟と西郷隆盛との腹芸だって、やっぱり動機は「和を以て貴し」となすだろうと思うのです。その後、ずうっと日本はその傾向が強い

いんだという、だから動物も植物も大切にしなければならぬ、それが一大乗の思想だと思ふんですね。

中村 そうですね。これらは、外国の思想では必ずしもそうじゃなかったですね。動物なんていうのは人間に奉仕するものだから、ばっさりやって構わないという気持ちがかかなり強かったと思うんです。ところが、ある時期から、やっぱり動物愛護なんていう思想が出てきまして、そして今日では、その動物愛護ということは、ある程度西洋人だって認めるようになりました……。

梅原 しかし、愛護ではいかなでしような。本来同じものだから……。

中村 本来、仏性はあるんだ。そこまではまだ……。

梅原 同じ仏性があるんだ。それまでは西洋思想はいかなですわ。

生命の尊厳というときは、人間の生命の尊厳しか考えない。

中村 そうでしょう。

梅原 動物の生命の尊厳は考えないですよ。我々毎日動物を殺して生きているんですから、尊厳を考えては

生きられないということはありますけれども、最初は一緒のものを、本当は殺してはならないものを食っているんだ、そういう考えがあるかないかはうんと違うわけですよ。

中村 違うと思います。それで、今おっしゃったことは人間の本性に基づいているものです。人間が反省してみると、生き物だって、やはり同じような生き物だから、同情の気持ちを持って対すべきもので、もとは仏性を持っているものだという考え方、これは西洋にだってあったわけです。ただ、西洋人が伝えないだけだと思うんですね。生き物を殺さないという思想は、ギリシャにでも部分的にありましたね。エンペドクレスなんかは、犬がほえていると、あれは、わしの過去の生存を思い出すと言ったとかと。

それから、アレクサンドリアの教父たちの思想ですね。これは日本では余り研究されていません。異端の思想ですけれども、東洋の思想と多分に共通のものがあります。それから、中世のフランスのカタリの徒というのがあるんです。これはキリスト教の異端ですが、十字軍の前

後からフランスに起こったはずですよ。それは生き物を殺さないんですよ。それには摩尼教の影響があるというわけですね。そうすると、当時異端審問というのをやったわけです。異端か、異端でないか、どうして見分けるかというと、鶏を連れてくるんですね。絞めてみるということです。それで、絞めたやつは、純粹のクリスチャンだということに許されるんです。ところが、かわいそうだといって絞めなかったやつは、異端だといって、火あぶりにされて殺されちゃったわけですね。西洋はそれだけ残虐なことをやっているわけなんです。けれども、西洋ではそういう残虐な方が勝ったのです。しかし現在、西洋人にだって、生き物を哀れむという思想を持っている人がいるわけなんです。

それで、まだそういう傾向はずっと続いていると思います。例えば放生思想、生き物を放すと。あれは東洋、東アジアで顕著な儀式になりましたけれども、レオナルド・ダ・ビンチは、自分の趣味として、小鳥などのつかまっているのを買ってきて、そして放してやるんです。それが趣味だったといひます。だから、途切れ途切れ……。

梅原 どこかにあるんですね。

中村 やっぱ人間である限り、どこかにあるということが言えると思うのです。それで、今日は殊にアメリカでは、ベジタリアニズムというのが急に盛んになってきました。あれは、やっぱり生き物を殺さないという思想ですね。キリスト教から出てくるわけでもないし、論理実証主義から出てくるわけでもない。やっぱり人間に一種の仏性みたいなものがあって、それが目覚めると、そのようなことになる。そこまでいきますと、東も西もないということになるかと思ひます。ただ、日本ではそういう自覚が早く起きたということです。

山川草木悉皆成仏について

梅原 そこで聞きしたいのですけれども、例の山川草木悉皆成仏とか、ああいう考え方は涅槃經にあるといひますけれども、違うんですね。あれは日本でできた考え方でしょいかね。

中村 私はどうもそういう気がしますね。

梅原 気がするんですね。ちよつと違いますね。

中村 ちよつと違うんです。

梅原 つまり、すべてのものに仏性がある。悉有仏性という思想は涅槃經にありますからね。しかし悉有仏性と山川草木悉皆成仏というのは大分距離があるんじゃないでしょうか。

中村 距離がありますね。と申しますのは、悉有仏性の方は、人間とか動物の類は仏性を持っているということです。けれども、山川草木までは及んでいないわけですから、山川草木まで言い出したのは日本だろうと思いますね。

梅原 あれはいづころできたんでしょうか。

中村 謡曲なんかに出ておりましよう。よく中陰經というお経が引かれています。「一仏成道して法界を觀見すれば、草木国土悉皆成仏す」といいます。そのお経にあることになっているんだけど、そういうお経はないんです。大藏經の中にもないんです。ということは、だけれか、平安時代だろうと思いますけれども、お坊さんが靈感みたいなものを受けて、こういうお経にあると思っちゃったんでしょう。

梅原 それは平安時代の文献ですか。

中村 平安じゃないかと思えます。奈良時代までたどれますかどうか。私はまだそこまで文献的に考証しておりませんが、とにかくアジア大陸にないんです。やっぱり日本で出たんです。

梅原 出たと思えますね。

中村 それには、日本の風土が美しいということですね。

梅原 草木国土悉皆成仏が、更に山川草木悉皆成仏になるわけですね。

中村 そう思うんですね。

梅原 悉有仏性が草木国土悉皆成仏に、更に山川草木悉皆成仏になるのですね。

中村 そうなんです。

梅原 だんだん成仏の範囲が広がるわけですね。

中村 道元の「正法眼蔵」を見ましても、今おっしゃったような思想でしょう。

梅原 そうですね。

中村 だから、日本では特に顕著になって……。じゃ、

なぜ顕著になったかというのですが、風土の美しいことですね。美しい自然に恵まれていることと、狭い島国の中にみんなが住んで仲よく暮らしている。そうすると、自然環境までも大事にしようという気持ちがどこかにあって、その両方が理由じゃないかと思うんです。

梅原 最近、私は神道を少しやってまいりまして、日本の古代の神道というのは、やはり縄文時代までたどるんじゃないかという考え方を持っているんですよ。

中村 そうでしょうね。

梅原 縄文時代の宗教はどこに残っているかというところ、これはアイヌとか沖縄とか、周辺に残っているという考え方なんです。そうすると、縄文時代というのは狩猟採集文化でありましたね。狩猟採集民族というのは、自然の中で生きていくわけです。そして、いつも動物や植物の命をとっているわけでしょう。アイヌや沖縄の信仰を見ると、すべての生きるものの全部人間と同じだと言っていますよ。つまり、熊も木も全部本来人間だということです。それらは天では人間の生活をしているんだそうです。それで、こちらに来たときに、熊や木になって仮装をして

くるんだそうですね。仮装してきて、そして土産を持ってきたというわけ。土産というのは、身をあげるという意味だそうですね。

中村 そうですかね。土産というのは身を上げるんですか。

梅原 身をあげるといふ思想で動植物はこの世にやってきたのですから人間の方は身をもらって、そのかわり魂を天に送り返す。そういうことだそうですね。

中村 なるほどね。

梅原 自分の身を与えて、その代り魂を天に送ってもらうためにこつちへやってくるそうですね。

中村 なるほどね。

梅原 だから、木を倒すのに、どうか私にあなたの身をください、この木で私は家をつくりまします。舟もつくりまします。その代り魂を天にとどけます。そう祈ってアイヌは一本の木を切るのです。ここに現われている考え方は熊も木もすべて人間平等だという考え方です。

中村 なるほど。だから、そういう基盤があったから、一乗思想を受け入れやすかった。

梅原 これは、農耕、牧畜が早く発展した国は、どうしても人間の自然支配の考え方が強いですね。自然を支配するためには、人間は動物や植物とは違うんだという考え方が基礎にあった方がよい。いわゆる西洋思想はこういう農耕、牧畜生活の中から出てきた思想ですね。ところが、長い間狩猟採集生活を続けた民族は、自然と同じだという考え方、私は、それが基礎にあるような気がして、このごろそう考えているんです。

中村 私は、日本の原始宗教の勉強を特にしたことがないんですけども、ほかの国の民族の原始宗教とか民族宗教に比べてみて、やっぱりおとなしい平和の気持ちに満ちた宗教だったと思いますね。

梅原 そうですね。自然に恵まれた……。

中村 恵まれた……。と申しますのは、ギリシャの宗教は、今パンテオンが残っておりますが、あそこでは、牛だとか羊だとかみんな犠牲に供したわけです。神様の前で殺しているわけですね。ところが、日本ではそういう犠牲は余りなかった。

梅原 ないですよ。

中村 せいぜい魚をちよつとお供えする程度じゃないですか。

梅原 そうです。

中村 神道の儀式を見ましても、だから、牛を捕まえてきて殺すという儀式は、神道でさえもなかった。

梅原 それは、アイヌの熊まつりを最初ヨーロッパの学者が見まして、熊は犠牲だろう、そのように思ったら、実は熊が神様だったんですね。(笑)

中村 そうですね。本当にね。

梅原 それを考え直すまでにかなり時間がかかったというんですよ。熊が神様で天に行くんだという考えをヨーロッパ人はなかなか理解できなかった。

中村 そうですか。

梅原 犠牲ではないんですよ。

中村 なるほどね。西洋人が見てびっくりしたと、説明を聞いてびっくりしたということはおもしろいですね。西洋人の考え方は違いますから。

梅原 だから、それを理解するまでに大分時間がかかったというんです。おもしろいと思いますね。

中村 どの国でも原始宗教は野蛮だったですね。

みんな牛や羊や馬を殺して供えたわけです。インドだつて、もとはそうですよ。だけど、仏教やジャイナ教が起きてから、そういうことをしなくなったんですね。ところが、日本の神道というのは、非常に簡単で、お魚は供えます。あれは取り上げて、ちよつと持ったら死んじやうわけでしょう。それだけのことで、特に殺すという必要はなかったわけですね。あとは野菜のようなもの、果物を捧げるわけでしょう。だから……。

梅原 ああいうのはもともと全部熊の魂が天へ帰るミヤゲとして持っていたものですよ。

中村 なるほど。そのころの熊というのは……。

梅原 やっぱり食べられる一番おいしい肉を与えてくれるのは神様ですよ。

中村 そうですか。

梅原 だから、一番大きなおいしい肉を与えてくれるのは北海道では熊で、本州では猪だったんじゃないですか。

中村 なるほど。猪ですか。

梅原 猪です。だから、シシオドリというのは、その名残だと私は思っていますね。獅子踊り、獅子まつり。

中村 あれはもとはライオンじゃないわけでしょう。もとは猪ですか。

梅原 猪です。

中村 それに獅子、ライオンという字を当てたわけですか。

梅原 そうです。

中村 なるほど。そうですね。日本にライオンはいないんですから。

梅原 猪と鹿、どちらも獅子といいますね。

中村 あれはどっちも獅子ですね。

梅原 シシというのはアイヌ語で第一の肉という意味です。シビというのが第一の魚。アイヌでは鮭、本州ではまぐろあるいはぶりでしょう。

中村 京都に鹿ヶ谷というのがありますね。

梅原 私のいる近くですけれども。

中村 そうですか。これは一番いいところに住んでいるらしい。(笑)

梅原 それはともかく、これからの人類に大変大切な考え方だと思うのです。ヨーロッパ文明は人間と動物とを区別している。

中村 そうです。

梅原 動物を征服することは善である。

中村 そうなんです。

梅原 そうして、そこに科学技術が加わったわけですから、自然がめちゃめちゃに破壊された。

中村 めちゃめちゃに破壊されたわけですね。

梅原 それでも人類はやっていけるのか。僕は、二十世紀はそういう意味で危機だと受けとめますね。

中村 危機がきますね。

梅原 それを解決するのは、本当に自然と人間の一体感。

中村 一体感ですね。

梅原 それが今の形の原神道にあるし、それをもう一遍編成したのが一大乗の思想ですね。

中村 理論的にね。そういうことが言えると思いますね。自然と一体という思想はシナにもあったと思うん

ですよ。「天地と我と同根」とかいうことを言っているから、あることはあったけれども、やっぱり日本の方がそれを余計表現しているんじゃないですか。

聖徳太子の政治思想

梅原 いつまでも古い自然と一体感という思想が残っていたのかもしれないね。巨大な政治権力ができますと、どうしても人間中心の支配圏をつくりまします。どうしても人間同士の差別をつくらなきゃならんでしょう。そういう意味では、人間と動物の差別という思想は人間と人間との差別に通じます。

中村 そういうことになりますね。

梅原 そういう政治形態が日本では成立するのが遅かったんじゃないでしょうか。

中村 その差別も、余り立てないというのが戦後の日本のまた一つの顕著な傾向じゃないですか。

梅原 そうですね。

中村 いい悪いはまた別にしまして、現在の日本は余り階級の差がないでしょう。だれもが富んでいる。これ

はヨーロッパとは違いますもの。

梅原 先生、私は、仏教が日本に何を与えたかと思うのですけれども、インドではカースト制を打破しようという形でくるわけですね。

中村 打破しました。

梅原 ところが、なかなか打破できなくて……。

中村 できなかったですね。

梅原 また再びヒンズー教へ戻ってしまったというところがあると思うんですね。どうも日本でもそれと同じようなことが起こったんじゃないか。私は、日本の方が階級制の打破に成功したんじゃないかという気が……。

中村 そうですか。

梅原 それはどうしてかといいますと、聖徳太子以前の世界は氏族社会ですから。氏族社会で、姓というのは一種のカーストじゃなかったかと思うんです。

中村 姓ですね。なるほど。

梅原 姓によってみんな決められている。大伴連何とかという、大伴が氏で連は姓、そうすると、大伴という血統と連という身分によって職業も身分も決められてい

る。全部姓に縛られているのです。それが氏族社会で、そういうところに律令社会をつくるには、それではとても人材を登用できないので、それで太子は仏教で姓の制約をゆるめて社会を平等化して人材登用をしていく。

中村 そうでしたね。

梅原 だから、それを見ると、例えて言うと、これは余り知っていないけれども、例の秦河勝です。彼は造すなわちミヤツコという姓です。ミヤツコなんていうのは、奴隷の姓ですね。秦造河勝というのは、これはうんと低い身分の人間と思うんですよ。

中村 御奴というのは奴なんですね。スレーヴですね。

梅原 うんと低い造の人間を……。彼は上から三番目ですね。大仁の位に登用しているんですよ。

中村 人材登用ですね。

梅原 これは、僕はもう平等思想でなければできないと思うんですね。

中村 それはそうですね。

梅原 それで、聖徳太子は仏教で、こういう氏族制度を打破したと思いますよ。古代の階級身分制、カースト

制を太子は崩壊させたと僕は思うんです。崩壊まではゆきませんが崩壊の基礎をつくったと思います。

中村 そうでしょうね。仏教によってカースト制を打破するという試みはインドでもあったわけですね。マウリヤ王朝が人材登用をやったわけですね。それを一番徹底的にやったのがアショーカ王(阿育王)なんですよ。仏教が広がる場合には、必ずカースト制とか世襲的な身分制打破と裏腹の発想です。ただ、インドではそれが永久には成功しなかったんですね。ところが、日本ではそれが成功したというのは、日本民族が偉かったのか、聖徳太子が偉かったのか、両方でしょうけれども……。

梅原 同じような人種ですから、どちらも黄色人種ですから、顔は余りかわらんから、おまえ、カースト低いやつだからと、見てもすぐわからんわけですよ。

中村 わからんですよ。

梅原 そこが成功した一つの理由だったと思うのです。だから、平等思想が実現したので。

中村 実現しやすかったでしょうね。第一インド人というのは、あれだけの大きな国ですと、色の白い人もい

れば、黒い人もいて、言語が土地によって全然違うわけでしょう。ところが、日本は一つの民族で、一つの習慣といってもいいでしょう。そして一つの言語で、顔色は同じですからね。

梅原 私は記紀にあるように、日本国家は外からの侵入者によって作られたと考えますが、侵入者が国を作るときはインドのアリーヤ族のようにやはりカースト制を作る必要があったと思います。古代王権をつくるためにカーストが一応できたと思うんです。

中村 そうですね。

梅原 そのカーストを解体させて新しい統一国家をつくる。インドでも仏教が出てくるときは、統一国家が出来る時でもある。

中村 これは、もうアジアの国のどこについても言えるわけです。小さな国が統一されて……。

梅原 人材を登用して……。

中村 まとまる、合一する。その場合に、仏教がイデオロギーとして採用されるわけです。

梅原 それは氏族宗教じゃないから……。

中村 氏族宗教じゃないから、それを超えたものとして……。

もうこれは、チベットでもそうですし、中国(シナ)でもそうです。それから遼とか金とか、ああいうような異民族でもそうです。それから、南アジアのビルマではアナウラーターという王様が諸部族を統一する。そのときに仏教という……。

梅原 そうすると、四姓平等というのは人材登用になる。

中村 そうなんです。だから、氏族制の打破と人材登用とは裏腹の関係ですね。

梅原 そうですか。だから、それは明治の政府みたいなものを聖徳太子はやったんだろうと思うんですね。

中村 そうだろうと思いますね。

梅原 徳川の体制を壊して、そして四姓平等になって人材登用をやった。それと同じことをやっているんです。

中村 廃藩置県ですか、殿様を全部なくしちゃうということ、あんなラディカルなことがあっさりできたわけですよ。これは、やっぱり日本に和の精神といいますが、何かそういう差別を立ててはいけないという気持ち、理

解がずうっとあったからじゃないか。

梅原 だから、聖徳太子がそれをここでやったと私は思うんですよ。

中村 そうでしょう。

梅原 太子がやった伝統があるから、明治維新ができた。

中村 やった伝統があるからで、あれは大変なことです。殿様というのを全部なくして、そして士族の身分を、名前だけを残したけれども、侍というものをなくしてしまった。大変なことですね。今の日本で一番のがんは官僚制だと思うんですよ。今必要に迫られているんだけれども、この官僚制はなかなか改革できないでしょう。そうすると、それを明治維新のときにやったというのは大変なことだと思うんです。それを古くさかのぼれば、やっぱり聖徳太子のお手本があったんでしょね。

梅原 なかなか大変なことだと思いますね。

先生、十七条憲法に戻りますけれども、儒教は徳の順序が、仁義礼智信でしょう。それを順番を狂わせて、仁礼信義智となっているんです。

中村 なるほど。

梅原 あれは何のためにああいうことをしたかという
と、私の考え方ですと、信を義の上に置いたんだと思う
んです。

中村 信を義の上に。

梅原 そうすると、人間は信では平等関係でしょう。

中村 そうです。

梅原 義というのは上下関係でしょう。だから、十七
条憲法を見ると、信は義のもととなりと書いてあるんです。
だから、信頼関係の方が上で、身分秩序はその次である。
まず人間には信頼があつて、その上に身分秩序があるべ
きだという、儒教とは違った考えですね。

中村 本当に「信は道のもと（道元）なり」という言葉
がありますね。

梅原 だから、わざわざあんな言葉を言うわけです。

中村 わざわざあんなことを言う必要はないんです。

梅原 ええ、言う必要はないんです。

中村 その前に、信というのは、ドグマを信ずるとい
う意味じゃなくて、真心という意味ですね。

梅原 人間と人間との信頼関係。

中村 そう、人間と人間の信頼関係。

梅原 だから、横の関係なんです。太子は、横の関係を
縦の関係の上に置いているんです。

中村 これは今の日本で生きていますね。信頼関係に
よつて事が動いているでしょう。日本人の間は契約じゃ
ないですよ。かなり大きな企業でも、やっぱり人と人との
信頼関係で動いていますものね。

梅原 会社でも身分秩序が先にあって次に信頼関係が
あるというのは、そういう会社はだめだと思ふんです。

まず信頼関係があつて、その上で、おまえが課長だ、私
は係長だという関係でないと、学長と学生でも、やっぱ
りきちんと信頼関係がないとだめですね。

中村 なければだめです。

梅原 身分だけであつたら、もう硬直した……。

中村 硬直してしまいますね。

梅原 そうですね。そのところが儒教と仏教の違い
だと思ふんです。日本社会と中国社会との違いのような
感じが僕はするんです。

中村 そうかもしれませんね。

梅原 あそこで、ああいう思想を持ってきたんですか
ら、僕は大変な人だと思います。

中村 これは、聖徳太子が偉かったということが言え
ましようが、同時に、それを実現させるための社会的基
盤も、風土に即しています。社会的基盤ができていたと
いう気がするんです。と申しますのは、家のあり方がシ
ナと日本じゃ全然違うんですね。シナへ行きますと、ど
の家も高い塀で囲まれているんですね。だから、家の中
では信頼関係が支配しているわけです。けれども、外か
らは何がやってくるかわからないから、高い塀で防いで
いるわけです。

梅原 そうですね。町がそうですね。

中村 町もそうですね。町も城壁で囲まれています。と
ころが、日本は家を見ますと、もう空けっぱなしでしょ
う。ことに田舎なんか行きますと、どこが入り口で、ど
こが門だかわからない。いろんなところから入ってきま
すものね。あれは、やっぱりその村の間で信頼関係があ
るからですね。だから、あれでできるんです。

それから、今お城の話が出てきましたけれども、ヨー
ロッパ、アジアの大陸の都市というものは、全部城廓で
囲まれているんです。だから、城ということと都市とい
うのが同じ言葉なんですね。

梅原 都市ですか。

中村 都市ですね。ところが、日本の城というのは違
うわけです。支配階級だけが城を持っているわけです。
民衆は城を必要としないから、自由に暮らしている。そ
れで、よその軍隊が攻めてきても、民衆は殺されなかつ
たわけです。だから、民衆は城を必要としなかったの
です。城というのは、支配階級のお殿様がよいよい最後
に城が落ちるといふときに、天守閣に火を放って、腹を
かつ切るといふ、それがお城でしょう。だから、全然意
味が違うんです。こういうあり方というものは、アジア、
ヨーロッパの大陸にはないと思ふんです。ヨーロッパだ
って、大体都市というのは城壁で囲まれている。それで、
下手をすると、中の者は全部殺されてしまう。殊に中央
アジアなんかひどいですよ。一つの都市の中の者が全部
殺されたものね。サマルカンドの跡とか何とか、

中央アジアの都市は大抵そうだと思うんです。これは日本の特長性だと思いますね。

梅原 それからもう一つ。十七条憲法の、これもわかったんですけども、礼を元と為すというふうにありますね。礼というのは、聖徳太子の考え方でいくと、上の天皇から下の庶民まで全部礼でいこうというんですね。

中村 なるほど。

梅原 ところが、これも儒教の考え方と思いましたが、儒教では、「礼記」に礼は民に及ばずと。

中村 なるほどね。

梅原 民まで礼じゃ無理だと、刑は士に及ばずと。

中村 なるほど。

梅原 上流階級では刑罰はやめる。民は刑罰でびびりしと取り締まって、上流階級だけ礼でやる。

中村 なるほどね。

梅原 それが儒教の考え方です。だから、太子の言うことには、一見は儒教のようで、これは儒教でもなかった。

中村 きちんと言葉を使いながら、日本的なものに改

めるわけですね。

梅原 だから、山川草木悉皆成仏と同じ思想なんです。

中村 同じ思想ですね。

梅原 全部仏性があって、全部礼でいける。だから、囲まんでも……。

中村 囲まなくても平気だったわけですね。

梅原 泥棒なんか入ってこないんだという。

中村 田舎なんかじゃ、泥棒なんて入ってこないですからね。もう田舎じゃ、お互いに人がわかっていて、先祖代々のことをお互い知り合ってるでしょう。だから、もう城壁みたいな塀で囲む必要はないわけですね。

梅原 そうですね。

中村 そして、現代にでもその考え方が生きているというのではないんですか。私は実業界のことをよく知りませんけれども、アメリカの実業家が日本へ来て驚くというんです。日本では、例えば重役が何かでも社員食堂と一緒に食べることがあるというんです。向こうではそういうことはない。それから、下の社員の言うことも一応耳を傾けるといいます。ところが、アメリカあるい

はヨーロッパでは大体重役だけで決めてしまうわけでしょう。ほかの連中はとにかく働け、使ってやる、そのかわり賃金は約束どおりやるというパターンですからね。

梅原 日本は身分秩序のきびしい社会だといえけれども、それはうそですね。

中村 うそですね。日本は共産主義の国ですよ。これほど共産主義を徹底的に行なっている国はないと思うんです。なぜかという例を申し上げます。私の友人の大蔵省の高級官僚がソビエト・ロシアへ行きまして、『ソビエト・ロシアというのはいい国だ』というんです。なぜかといいますと、身分制が確立しているというんですよ。下の者は決して上の人に逆らうことはできない。だから、ストライキなんかやったら、もう首です。そして、俸給の差が日本では一番下の官吏と最高の官吏とでは一対十にならないそうですよ。

梅原 そうですか。

中村 ところが、向こうはもうそれどころじゃないですよ。何十倍で、しかも高級官吏だけの通る道なんていうのができているわけでしょう。だからロシアという

のは、役人にとっちゃ、住みいい国だといっていますよ。

梅原 先生、この間、徳川時代の研究をしている人が、徳川時代は身分制の社会で、大名は大名で、足輕は足輕だという印象を僕らは持っていたんですよ。ところが、田沼意次という人間は、もう旗本の中でも下の下、最低の御家人の出身です。それが幕府の最高の実力者になる。中村 そうなりますね。

梅原 家柄のよい身分の高い大名や旗本では経済政策が出来ない。その経済政策を中心にして実務官僚が出てくる。柳沢吉保が最初です。

中村 柳沢吉保だって身分は低かったですね。

梅原 だから、そういうのがずうっとあって、それが田沼になる。だから、十七、十八世紀の日本というのは、表面を見たところは階級社会で、実は、どんどん足輕みたいな者がずうっと登用されて……。

中村 勝海舟だって身分にしてみたら……。

梅原 だから、柳沢吉保から勝海舟までずうっとあるんです。ああいうのは不思議だといっています。

中村 だから、中央政府の官僚というのは、人材登用

主義だったんですね。

梅原 そうです。幕府でも大名でも、みんな貧乏になつてくるでしょう。そういうときに実務官吏が出てきて、そういうのが足軽ぐらいの身分から成り上がって権力を持つようになる。

中村 権力を持つ。そういうことはあります。

梅原 だから、そういう上下の変動の激しい社会、そういう社会が日本の徳川時代であった。徳川時代で民衆の一番の憧れは役者と花魁ですね。花魁と役者が一番の人氣があつたわけです。ところが、花魁と役者というのは、階級的には一番低いわけです。

中村 階級でいくと、そういうわけですね。

梅原 ところが、西洋だと貴婦人崇拜とか階級の高いのを崇拜する。

中村 そうです。貴婦人崇拜……。

梅原 日本では、一番階級的には低い……。

中村 なるほどね。

梅原 これは、考えてみれば不思議な現象だと思ひますね。だから、先生がおっしゃったように、一大乗の国

なのか……。

中村 その方ですね。やっぱり一大乗の国ですね。

梅原 先生は共產主義とおっしゃったけれども……。

中村 共產主義というのは冗談というか、産を共にするという意味です。(笑)

梅原 そこはずうつつながっているような気がしませんでした。

中村 昔からずうつつながっていますね。

梅原 聖徳太子から今まで……。

一乗思想と如来蔵思想

梅原 先生、今の勝鬘經義疏ですけども、後半いくと、勝鬘經の体といたしましたかね。体は一乗思想だと相は何かというと、如来蔵思想だと。如来蔵思想というのは、煩惱の中に菩提の種が含まれている。煩惱が多ければ多いほど、そこに悟りへの種をいつも含んでいるんだ。それは非常にパラドシカルな……。

中村 パラドシカル、そのとおりです。

梅原 そして、それは信じがたい思想だと……。だけ

ど、それを信ずることが大乘仏教であるということを太子はあそこに言っているんですね。それで、こういうことを繰り返して、このパラドックスを信ずることこそ大乘仏教だということを言っているんですよ。この文章を読むと太子の心のリズムが伝わってくる。あそこに僕は感動しました。何か昔教行信証を読んだときのような感動で、それは、恐らく太子は煩惱の中に住んでいますね。政治権力のさなかで、今だったら、角柴さんみたいな……。(笑)それで、奥さんもたくさんいましたね。そして、太子伝暦を見ると、正妻が犬に、お妾さんが鹿で、正妻がお妾さんを殺した夢も見たというのです。太子は犬が鹿を食った夢を見た。太子は皇族ですから、奥さんをお妾さん抱えている。そういう俗人ですね。煩惱の中に生きながら、そしてそこに実は救済の種があるんだと。そういうことを太子が書いたという、何か太子の肉声が響いてくるような、僕は非常に感動しました。あれはすばらしい文章だと思いますね。

中村 そうですね。如来蔵思想を取り上げたということとは、勝鬘經には殊によく出ていますが、仏の法身自体

じゃないんですね。仏性そのものはあるんだけれども、それに煩惱がまといついている。煩惱の中にある仏性というものの、それを如来蔵としてとらえたわけです。これが人間の現実の生きている姿じゃないでしょうか。

梅原 如来蔵思想というのは、仏教思想の中で大体どういう形で発展いたしましたか。

中村 大乘仏教になってから出てきますね。

梅原 そうですか。

中村 最初のうちは空観ばかり説いていますから、空だけ説くわけですよ。

梅原 そうですか。

中村 けれど、如来蔵思想ということを説くようになったのは、やっぱり勝鬘經あたりが初めてでして、それから大乘起信論ですね。それから如来蔵經典というのが幾つかあるんですよ。楞伽經だってそれを受けております。だから、あっちこちの經典には出ているんですね。

梅原 その如来蔵思想というのは、そういう悟りがあるといふ明るい面を強調する場合と、煩惱にまとわれているんだという暗いところを強調する面とがありますね。

中村 そうですね。どっちを見るかということ……。
梅原 見るかですね。太子は、どうも煩惱がまわり
ついている方を見ている。

中村 そうでしょう。というのは、現実政治家だっ
たわけですね。最高の権力者で、指揮したわけですから、
嫉妬してはいけなとか、裁判は公平でなければいかん
とか……。

梅原 賄賂を取っちゃいかんとか……。十七条憲法は
すごいですね。

中村 すごくですよ。

梅原 今でもあれは通用しますね。

中村 十七条憲法を、現代語に訳したものを高級官僚
に送りましたら、耳が痛いと言っていました。だから、
こういうことなんですね。「人のために官職を設けては
いかん」というんです。「官職のために人を求めよ」と
いうんです。つまり、偉いお役人がやるから、何か
公団でもつくってあげましょう、と……。そういうのは
いけないというんですね。まず公団が必要だったら、じ
や、そこにだれか適任者を求めよというんですね。これ

は、今の世の中では、行革の原理ですね。

梅原 僕は、話をしたときに、こんなことを言ったら、
やっぱり太子は失脚しますよ。この憲法は非常に厳しく
ていいけれども、これじゃ無理だ。九〇%まで官のため
に人を求めよ、一〇%だけは、人のために官を求めよ、
そう言ったら、みんな喜んでいましたよ。それならわれ
ら官僚は救われると。

中村 非常にプラティカルな解決方法です。聖徳太子
の教えをプラティカルに生かされる。

梅原 だけど、私は、今のそういうパラドクシカルだ
という大乘仏教は、そういう煩惱即菩提の思想なんでし
ょうね。そういう煩惱の中に仏性は隠れているというパ
ラドクシカルな説を信ずることが大乘仏教だという。そ
れを太子は他人の問題じゃなくて、自分の問題として語
っている感じがしたんです。それを読んだときに、何か
最澄、親鸞の本を読んでいるような気がした。みんなも
う最澄の懺悔ですね。親鸞の懺悔ね。そういう浄土教に
近いような、太子は後の日本仏教を先き取りしている。
片一方で一乗思想だったら、法華経の方へいくし、片一

方で如来蔵思想だったら、今度は浄土真宗の方へいくよ
うな、すべて太子の中に含まれている感じがしました。

中村 そうですね。だから、親鸞上人が聖徳太子にも
う熱愛しているといいますが、熱烈な尊敬を払っていま
すものね。

梅原 そういう気持ちがありましたね。親鸞は太子
の著作を読んでいなかったと思いますけれども、どうで
しょうかね。

中村 いや、全部は読んでいたかどうか知りません
が……。

梅原 読んでいたかしら。もう直観的に……。

中村 直観的に崇拝していたんですね。

梅原 六角堂ですね。最初のそういう女人妻帯のお告
げがあった……。

中村 ああいうお告げがあったと、あれも本当かうそ
か知りませんがともね。うそだという学者もいるん
ですが、私にはわかりません。

梅原 それは、シンボリカルには非常によくわかりま
すね。

中村 シンボルですよ。シンボリカルに実におもしろ
い。

梅原 そうです。

中村 意義深い伝説だと思います。

梅原 愚禿親鸞——僧でなくなったわけですからね。
僧でなくなった宗教家を探したら、これはもう聖徳太子
以外にない。

中村 そういうことになりますね。諸宗の開祖のうち
でも、親鸞上人が一番聖徳太子に傾倒していたんじゃない
ですか。

梅原 そう思いますね。

中村 そんな印象を受けますね。

梅原 最澄も尊敬していましたね。

中村 確かに、太子を一番尊敬していました。

梅原 最澄と親鸞が一番きついんじゃないでしょうか。
太子崇拝があるかどうかは、親鸞と法然の違いだと思
いますね。

中村 なるほど。

梅原 法然には聖徳太子崇拝はないんですね。

中村 法然にはないですね。

梅原 ですから、倭国の教主という考え方がないです。

中村 ないですね。

梅原 そこは、今の妻帯、つまり、法然はやっぱり最後まで坊さんの立場ですね。

中村 そうですね。聖僧でしたからね。

梅原 ところが、親鸞はやっぱり妻帯した。それで俗人になったというところに、むしろ聖徳太子を契機にして踏み切ったわけですからね。

中村 そうかもしれません。そう言えましょう。あれは道元にしても、倭国の教主という思想はないですね。

梅原 ないと思います。

中村 それから禅宗の偉い方にもない。日蓮上人の場合、ところどころむしろ批判的でした。

梅原 太子に対して。

中村 はい。

梅原 そうですね。

何か偉大な人の思想心も萌芽の形で、後世発展するすべての思想を含んでいるんですね。

中村 含んでいるんですね。本人自身は自覚しておられたかどうかわかりませんが、結果から見ると、含まれていたということが言えますね。

それから、大工さんとか職人とか、ああいう人は、みんな聖徳太子を元祖として拝んでいるというんですね。職人のいろいろな講がございましょう。あれがみんな聖徳太子を奉っていますね。私は、一々そういうことを調べてもいませんけれども、法隆寺が出している「聖徳」という雑誌があるんです。あれは、途切れ途切れに民間の職人なんかを保たれている、続いている太子信仰というのをずっとたどっていますね。そうすると、意外なところで信仰が残っているんですね。あっちこっちに太子堂というのがございましょう。東京でも世田谷に太子堂というのがありますね。あれは、民衆が太子を拜んでいたんですね。

梅原 それは東北なんかに太子信仰があるんですよ。

中村 そうですね。

梅原 そういうのは、どうして太子信仰があるのか、よくわからないんですけどもね。

中村 どうなんですかね。

梅原 土俗信仰と……。

中村 土俗信仰と結びついているんですね。

歴史家は、土俗信仰を余りそれほど問題にしないですけども、あれは、太子の日本人に与えた影響ということとをたどるためには、やはり一応総括的に調べてみる必要があるんじゃないでしょうか。

梅原 そうですね。

それから、今の如来蔵という考え方と、先ほどからつながっているんですけども、そういう如来蔵という考え方に立つと、先ほどからずっと話しているんですが、何か聖なる世界が人間の別の世界にあるんじゃないかって、聖なる世界は俗なる世界の中にあるという考え方が出てまいりますね。

中村 そういうことになりますね。つまり、聖というものが俗と対立してしまうと、もう絶対視じゃないわけですね。

梅原 そうですね。

中村 対立の一方ですから。だから、もし絶対のもの

ということが言えるんだったら、聖も俗も含んでいるもの。だから、如来蔵のようなものということになるんじゃないでしょうか。そういう具合に考えまさんと、絶対者というものが説明がつかないと思うんですね。相対に對立している絶対者というものはもう絶対者じゃないわけですね。必ず相対を含んでいるものでなければいけない。西洋の宗教思想では、どうしても聖と俗と對立していますね。

梅原 そうですね。

中村 ところが、日本人の場合には、聖が俗の中に包まれているといえますかね。

聖徳太子の講經の意味

梅原 先生、一つ私がちょっとよくわからないところがあるんですけども、聖徳太子は、推古十三年に、ちやうど今の飛鳥寺の法興寺の本尊の丈六の釈迦像をつくりました。仏教が新しく変わった証拠にあの仏像をつくって、そして落成式をやったわけですね。それとお父さんの用明天皇の供養とつながっているみたいなんです。

けれども、その供養の話はまた後にしまして、そこで勝鬘經を講読しまして、そしてその年にまた法華經を講読したわけですね。つまり、講読というのは、勝鬘經と法華經の二經の講読だったわけですね。ところが、義疏をつくったときに、もう一つ維摩經が入ってきたんですね。

中村 なるほど。

梅原 しかも、勝鬘經義疏を先につくって、後から法華經義疏をつくったが、その間に維摩經義疏が入ってきたんですね。これは、先生、どのように考えたらいいんでしょうか。

中村 そのところは、私はちよつと勉強しておりませんので、何ともお答えできないのが残念ですが、ただ、このことは言えると思うんですね。帝王が經典をこのように講義するということは、南アジアでは絶対ないことです。インドでもないことです。

梅原 そうですか。

中村 つまり、聖と俗が離れているわけです。必ず出家した比丘が説くんです。帝王が講義したという伝説はございません。強いて似たものを求めるならば、シナで

ですね。あれは梁の武帝ですか。

梅原 梁の武帝です。

中村 講經の図というのがございます。だから、あのあたりから始まるんだろうと……。

梅原 太子は、梁の武帝を君子の模範にしていた……。

中村 梁の武帝のときに、とにかく大きな版図をすべてまとめたといえますね。文化政策があつたとき実現するわけでしょう。だから、それをお手本にしたということは十分考えられます。それから、西洋人に私はいろいろ確かめるんですが、西洋で帝王がバイブルを講義したというところは絶対にあり得ないんです。

梅原 そうですか。それはおもしろいですね。

中村 だから、これはもうシナに始まって、殊に日本でもパターンとして決まったわけですね。講經ということとは梁の武帝がやったとしても、聖徳太子が崇拜の対象になるということは日本だけです。

梅原 そうですか。

中村 法隆寺へ行きましても、四天王寺でも、みんな精靈殿があつて、太子を拝んでいましょう。

梅原 そうですね。

中村 太子が信仰の中心になるんですね。こういうことはよその国にないんです。これは、やっぱり日本の特性じゃないでしょうか。

梅原 今のは大変おもしろい話なんで、太子はどうも梁の武帝を模範としまして、それと煬帝も、どうも梁の武帝を模範としているところがあるんです。

中村 そうですか。

梅原 煬帝も經典を講義したという話はあるんですね。その話を聞いて、そして太子も梁の武帝のように、煬帝のようなそういう經典の講義をしようとした。だから例の、「日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す」という国書を持っていたんですね。妹子が隋に、その時妹子は海の西の国に再びそういう菩薩の天子があらわれたというのをいっているのです。再びというのは隋の梁の武帝がおつて、それでまた隋に煬帝という菩薩の天子が出たのは、それに敬意を払いに來たという意味だと思ひます。

中村 なるほどね。そうかもしれませんね。

梅原 それで、菩薩の天子のまねをしようとする。だから、どうしても經典の講義をしなければならぬ。それともう一つ頑張つて、三經義疏をつくる。だから、當時の思想的状況の中では、太子が二經の講読をし、三經義疏をつくったことを、今の「日出づる處の天子」の、つまり、使者の語つた言葉によつても、僕は明らかだと思ひますね。あり得ると思ひますよ。

中村 なるほどね。これは、アシヨールカ王なんかと大変違うんです。アシヨールカ王はインド全体を統一しました大帝王ですが、自分が講義するということはないんです。非常な権力者でしたけれども、お坊さんにさせているんです。それから、西洋にそれに対応するものというところ、コンスタンチヌス帝がよく持ち出されますが、ところ、カトリックの大神院なんかにいくと、横の方に小さめのコンスタンチヌス帝の像がちよつとあるんですね。それはつけ足ります。ところが、日本の聖徳宗とか和宗とか、ああいうようなお寺でも聖徳太子が中心である。これは大きな違いです。

梅原 先生、それと維摩經とつながっていますね。

中村 そこが維摩経につながるんじゃないですか。

梅原 維摩経は帝王が経典をつくる一つのアポロギアに……。

中村 アポロギアになりますね。それによってジャステイファイされる。そういうことはございました。維摩がとにかくお坊さんたちを前にして説法するわけですからね。これは、聖徳太子のイメージにちようどつながるわけです。これは大乘仏教から始まったアイデアですね。

梅原 そうですか。

中村 古い時代のテラガーターとか、ヒーナヤーナにはないことです。

梅原 大乘仏教でも、インドではそういう王様の例はないわけですか。

中村 ないです。聞きませんね。それは、帝王の伝説なんていうのはいろいろありますけれども、自分が講義するということはないんです。必ずお坊さんに供養して、そして何か講義してもらっている。

梅原 維摩は帝王じゃないですね。

中村 そうですね。帝王じゃないです。セイロンのお坊さんなんかにも、私はいろいろ確かめてみましたが、南アジアでは、そういうことはありえないと言えますね。

梅原 そうですか。

中村 だから、これは全く日本独特ですね。そして、世俗の中に宗教が生かされているということになります。おもしろいですね。

梅原 だから、そういう先生のご説を使って私も考えますと、はじめに勝鬘経義疏を書いて後に法華経義疏をつくるわけですが、その真ん中に維摩経義疏をおいた、なぜそういう本をつくるか、アポロギアをやったということが考えられますね。

中村 そうかもしれませんね。それで、その目で見ると、法華経が違ってくるわけです。さっき申し上げました山林にこもっているようなお坊さんじゃないということ、治生産業、皆是れ仏法ということが法華経の中にございますね。あれはサンスクリットの原本を見ると、余りはつきり出ていないんですよ。ところが、あの文句は日蓮

上人も大事にされましたね。それで、聖徳太子もあの精神でされたと思うんですね。そこに力点を置いたということ、一つの方向づけを示しています。サンスクリットの原典を見ますと、いろいろの職業、世俗の活動があるが、それは根本の道理と背かない。その程度の表現だったのです。ところが、羅什の訳だと治生産業というんでしょう。そうすると、もう世俗の職業を全部は認し、肯定するということまでいくわけですが、太子はそれを受けて、法華経のうちでも、特にその精神を強調されたんじゃないかと私は思うんです。

梅原 そうですね。

中村 というのは、法華経全体から見ますと、山林にこもることを勧めている教えの方が多いんですよ。私は、原典からそういう印象を受けるんですね。

梅原 「衆生病む故に我病む」という例の維摩経の言葉がございませうね。

中村 維摩経にございませうね。

梅原 あそこは、維摩経義疏の中心じゃないかと私は思うんです。

中村 そうでしょうね。

梅原 結局、民衆の人民の苦しみを苦しみとするから、ここへとどまった。菩薩のここへとどまる理由は、「衆生病む故に我病む」ということになりますね。

中村 そうです。

梅原 あそこところが太子の思想の中心ですね。

中村 そう思います。

梅原 これは見事な思想だと今でも私は思っています。

中村 本当に見事な思想だと思います。

梅原 だから、あそこでたしか五重の問答というのをやっていますけれども、あれはやっぱり自己問答で、自分の存在理由をみずから尋ねていると思うんです。これは非常に難しい文章ですけども、何かそういう太子の気持ちこそこへ入れていきますと、すばらしく生きていくんです。ところが、勝鬘経義疏と維摩経義疏は難しいけれども、私は大変感動するんですが、法華経義疏はもうひとつ、法華経はこんなに大きいのに理解は簡単ですね。

中村 はい。要点を突くというような書き方で、偉い

ものだと思います。

梅原 そうですね。解釈として。

中村 あれは、ただ学者がやるように全部解釈していったら、膨大なものになるだろうと思うんですが、そうじゃなくて、中心思想をばっについて明らかにする。そういう態度を感じます。

梅原 それは一大乗ですね。

中村 一大乗です。

梅原 それから、三界の譬喩とか火宅の譬喩とか、あの辺がやっぱり太子の仏教にひかれた所以なんでしょうね。

中村 恐らくそうでしょう。

梅原 あの時代にあんなことを理解したというのは大変なことですね。

中村 大変なことだと思います。そして、法華經というものは、小乗があったから、それに対して立場を示すという意味で、殊に迹門の部分は説かれておりましようけれども、日本人にとっては、声聞とか小乗というものがピンとこないわけですね。だから、いきなり大乘の思想

を聖徳太子はばつとぶつけて明らかにする。そういう態度をとっているという印象をどうも受けるんですが……。

聖徳太子のインターナショナルイズムとナショナルイズム

梅原 先生、三経義疏というのは、太子伝補闕記によれば、推古十七年から書き始めて、推古二十三年に書き上がったことになるんですけれども、そうすると、晩年なんです。太子が政治の第一線に登場したのは、私は推古九年と考えているんですけれども、約十年間は政治の第一線で活躍し、そして十七条憲法を制定して、冠位十二階をつくって、日本律令体制の基礎をつくったんですね。それまでは政治家だったと思うんです。

中村 そうです。

梅原 それから推古十七年から彼は思想家にかわったんですよ。

中村 つまり、晩年になったら、反省期に入ったというんですかね。

梅原 反省期というよりも、実際は、彼はそれをやり

たかったのでしょうかね。つまり彼は思想家であり、思想家

家になりました。そして、政治からだんだん孤立したと私は思います。ところが、推古二十三年に三経義疏を書き終わったときに、隋は滅びるんですね。隋の亡国の知らせが来るんですね。それから太子は何をやったかといひますと、「天皇記及国記・臣・連・伴造・国造・百八十部并に公民等の本記」をつくる。歴史の編集をやっているんですね。

中村 なるほどね。

梅原 だから、これは古事記や日本書紀の基礎になったと思うんですが、太子は片一方でインターナショナルな仏教書をつくり、片方でナショナルイズムの歴史書をつくる二つの古典をつくっているわけですね。

中村 そういうわけですね。

梅原 それは隋の亡国を見ると、インターナショナルイズムだけではやっていけないと……。

中村 そうでしょうね。

梅原 やっぱリナショナルイズムが必要だが、日本という国はどういう国かということが明らかにすることが必

要だと考えて、両方つくった。これはもう大変な天才……。

中村 大変なことですね。

梅原 その事実も今の歴史家は否定するんですね。つまり、そういう天皇記・国記・本記をつくるということはありません。そして、日本書紀ができたのは養老四年七二〇年なのです。太子が天皇記をつくったというのは推古二十八年、六二〇年なのです。ちょうど百年前なんです。太子のつくった歴史書の百年後を記念して日本書紀をつくったと僕は思うんです。日本書紀が百年前のことをうそを書く必要はない。蘇我氏の滅びるときに天皇紀日記などを焼いたのを、船恵尺が国記をとり入れて中大兄皇子に奉ったとあります。このようにはっきり書いてあるわけですね。うそじゃないはずなんです。それが、歴史家は聖徳太子を認めようとしなくて、それはうそだという。それで、聖徳太子が、天皇記、国記を作ったのはうそで、帝記・本記というのが欽明時代につくられたという説です。聖徳太子がつくった歴史書がもとになって記紀ができた、僕はそれはごく当たり前の考え方だと思っ

中村 それは非常にくだらない理論だと思いますね。
梅原 津田説は逆さまになっている。聖徳太子を認めようとしないうちに、帝記・本記ができたのをうんと前に置いたんです。僕は、文献の時代というのは、やっぱり太子から始まると思うんです。

中村 そうでしょう。そうだと思いますね。

梅原 やっぱり文字の時代にまず十七条憲法を作り経典注釈書を作り、歴史書もつくったと考えるべきじゃないでしょうかね。

中村 大したことですね。あの時代にシナ大陸を往復するなんていうことは容易にできることじゃないのに、向こうの文物を我々の祖先はとにかく取り入れて、漢字というものが、いつの間にか日本人の共有財産になってしまったんですからね。偉いことがあつたとき始まったわけですね。

梅原 あのととき始まったのですね。

中村 漢字が読み書きできるのは、日本の方がパーセンテージが多いでしょう。中華人民共和国では漢字の読める人は、パーセンテージで申しますと、比較的にな

いわけですからね。ここまでお隣の文化を取り入れて、そしてもう自分のものにしてしまった。その端緒をつくったのが聖徳太子だということは間違いないでしょうね。
梅原 確かにそのとおりですね。いろんな意味で革命的なことですね。

中村 革命的ですね。

梅原 遣隋使を出しているでしょう。あれもすごいことじゃないですか。

中村 すごくいいことですね。今でさえシナと往復するというのは、船だったら容易じゃないのに……。

梅原 当時の秀才を全部よりすぐって……。

中村 よりすぐってやっただけですね。そして、経文とか、そのほかいろいろな道具、文物というものをずうっと持ってきておりました。昔の人はよくやっただけですね。自分自身を顧みまして、一遍外国へ行つて、どれだけの物を持って帰れるかというと、ほんのちよつとしか持って帰っていない。昔の人は偉かったと思いますね。

梅原 空海の将来目録は大変なものですね。

中村 大変なものですね。

梅原 あんなに持ってきたんですからね。

中村 国家権力の援助があつたからでしょうけれども……。

梅原 あつても大変ですね。

中村 大変なことですね。そして、大規模に向こうの文物をどんどん取り入れて、果ては中国自体に残っていないものが日本にはあるというわけでしょう。偉いことです。その発端をつくったのは、聖徳太子だということは間違いないでしょうね。

梅原 やっているうちに、もうだんだん聖徳太子崇拜になつてまいりましたね。お札がなくなるのは寂しくしょうがないですね。やっぱり福沢諭吉さんには悪いけれども、太子と勝負するのはかわいそうだと思うんです。福沢さんも偉い人だけれども、太子と比べたら、これはやっぱり違います。格が違います。だから、聖徳太子を守る会でもつくろうかと言ったら、大蔵省関係のある政治家が対談のときに、反対せんとしてくれという、実は、太子は五万円札にとつておいてあるから……。

中村 またご登場願う……。

梅原 だから反対されると困るといつて……。

中村 その間、ちよつとご休息になつて……。

梅原 ご休息になつて……。 (笑)

中村 それまでまた梅原古代学を大いに発展なさつてください。

梅原 先生、どうもありがとうございました。

中村 ありがとうございます。

梅原 大変いろいろ教えていただきました……。

中村 私こそ大変いろいろ教えていただいて、楽しかったです。

(なかむらはじめ・東方学院院長)
(うめはらたけし・京都市立芸術大学学長)